

松 山 大 学 論 集
第 28 卷 第 4 号 抜 刷
2 0 1 6 年 10 月 発 行

地域に生きる人々の生業と暮らしの記録

—— 事例・公刊・研究 ——

神 立 春 樹

地域に生きる人々の生業と暮らしの記録

—— 事例・公刊・研究 ——

神 立 春 樹

は じ め に

地域に生きる人々の生き様の記録を見出し、それをどのように公にするか、そして、それをもとにその時代性、地域性を如何に究明するか、本稿はこの歴史研究における重要な課題についての一つの試みを記すものである。

I 地域に生きる人々の記録—いくつかの事例—

地域に生きる人々の生き様の記録を見出すことの試みとして、見出した地域に生きる人々の記録を紹介する。

1 星野七郎著『村の記憶—手賀沼縁りに生きて—』

2008年6月 崋書房 新書判 261頁

本書は、千葉県東葛飾郡湖北村（現我孫子市中里）に生まれ人生を送る星野七郎氏のこの地に生きる人々の生活の記録である。所は手賀沼北岸の湖北地域、時は主に大正・昭和戦前期、著者は代々この地で農業を営む家に生まれ、農業に励んできた人である。

(1) 本書の概要

本書は、章部分が、火と水の話—かまだんと井戸、子供の世界、結婚・葬式—しゅうげんとじゃんば、暮らし—いろいろ、米づくりと開田、沼の漁業、であり、それぞれいくつかの節部分、からなる。この地の人々の生活についての四つの

章部分と、米作り農業と手賀沼の漁業についての二つの章部分という構成である。

〔第1章〕火と水－かまだんと井戸，では竈の位置・役割に始まり家屋の構造にまで及ぶ住居と，生活用水の井戸について記される。

〔第2章〕子供の世界，は子供の1年，子供の仕事，食べ物，おもちゃと遊び，からなる。

子供の1年，には学校生活を軸に1年間の子どもの生活暦が記される。元旦の四方拝，四大節，入学式は外着の児童の緊張とその後の解放感が伝わる。学校の運動会は村を挙げての行事であり，8月の夏休みの親に内緒の手賀沼遊びは子どもの世界である。

一家総出の野良仕事の時代，子どもは家仕事の担い手である。電燈が入るまでのランプのほや掃除，風呂焚きが記される。

農家の主食は麦飯であるが，子どもはそれを握っておやつとする。大正末期より昭和の初めに駄菓子屋が各部落に1～2軒あり，天気良ければ毎日のように行商が来たという。

子どもの遊びは，ねんぼ，鉄砲，木独楽，竹鉄砲など，遊び道具を作りながらである。蛇を追いつまえて首に巻く，喧嘩も叩き合いではなく取っ組み合いで，組み伏せて勝負がつく。やさしい村の子どもたちである。

〔第3章〕結婚・葬式－しゅうげんとじゃんぼ，の（第1節）祝言，では嫁婿探しから結納，祝言当日，見参（披露），膝直（里帰り）など一連のことがらが詳細に記される。嫁入りした娘の実家での蚊帳織りという風習もある。（第2節）葬式（じゃんぼ・じゃんぼん），では葬儀について，葬儀の準備から葬式，そして後始末までが順次詳細に記される。

〔第4章〕暮らし－いろいろ，は，仕事あれこれ，神仏参り，お金あれこれ，村の若もの，である。

仕事あれこれ，には昭和初期に入った足踏み脱穀機での稲抜き作業，粃のとずら篩かけ，唐箕あおり，などが記される。

神仏参り、には古くからある出羽三山参詣の昭和9年の様子、春4月下旬の大杉囃と三夜待、水稻の種まき終了後の種蒔正月などが記される。

お金あれこれ、にはお金のことが記される。まず農村の金融としての無尽講・頼母子講がある。とはいえいつも融通されるものではない。農家のもめごととは、このお金のないこと、手が回らないこと、家族に弱い者、病人などがいて貧乏なこと、などによるごたごたである。お金に困る農家に前金なしで急病人の往診に応じない医者、期限の大晦日に借金返済に行くも風邪気味で早く寝たというので翌日元旦に再び行くと期限切れだと1カ月分の利子を余計に取る金貸し、など強欲な存在もある。そして、このようなもめごとに金を出して急場をしのがせる、あるいは、小自作農が売りに出る自分の田地続きの田を買うのに不足の金を貸してほしいという願いに応ずる地主もいる。著者の父親であるようだ。

村の若もの、では若者の遊びと仕事が描かれる。浅間神社の祭りの日の賑わいと寄り合う若者たち、遊ぶにかかる金を工面する一つに自家の稲刈り日の粃すりのときに、米俵をひそかに持ち出す「米かつぎ」ということもする。また、一日の労働の後、夕食後の流しもとでの娘のかたづけを見計らい訪ねる「流し廻り」という工夫もある。そして、夏の早朝からの牛馬の朝草刈り、朝食の後の野良仕事などの仕事とその後の行水のような入浴、夜、若者たちは寄り合う。

〔第5章〕米づくりと開田、は大正・昭和初期の水田耕作、沼の開田、からなる。この地に繰り広げられた手賀沼の開田、水とのたたかい、そして米作り、人々の労働と暮らしが記される。

著者にはすでに『手賀沼の今昔』という関連文献を駆使した手賀沼をめぐる書があるが、(第2節)沼の開田、では沿岸地域の農民の手による開田の努力が記されている。草生地に沼の泥をとり積み上げていくがそのためのサツパ舟や鋤簾、作業の仕方などや、この地先に堤防をつくる土とり運搬・積上げ、土砂の流失を防ぐための柵づくり、など、水との格闘の下での開田の営みが記される。(第1節)大正・昭和初期の水田耕作、では水田における稲作農業が記

される。田の秋起しから畔塗り、堆肥入れ、代かき、苗代作り、そして、田植え、田の草とり、稗抜きから稲刈り、脱穀、粃干し、粃すり、という稲作作業、さらにそのあとの藁始末、小作米などの一連のことがらが、土地の用語を混ぜながら逐一記されている。

〔第6章〕沼の漁業、では手賀沼の漁業について、舟・漁具、漁法について記す。実に多くの漁法がある。この地の人々の生活の糧としての、実にさまざまな漁りの工夫・働きの様子が記されている。この一つの沼池での漁法の多様さはその特性に由来する生息する魚類などの多様さを示すものであろう。

以上のように六つの章部分に分けて、この地に生きる人々の生業・生活が克明に記録されている。

(2) 歴史研究における本書の意義

著者は、1914（大正3）年生まれ。旧制東葛飾中学校を3年で退学し、以来家業の農業に従事してきた。やがて、我孫子町議会議員、農業委員、手賀沼土地改良区理事・理事長など地域の担い手となってきた。そして『手賀沼の今昔』、『手賀沼の詩』、『新編手賀沼周辺生活語彙』などの著書があり、地域を語る湖北座会の会長という研究心旺盛である。温厚、忍耐、配慮深いという父の篤農精神に学び、農業労働に打ち込んできた人であるからこそ、勤勉で、お互いに助け合い、肩を寄せ合って生きてきた人々の生活を、克明にそして軽妙に描いたのであり、非情な一面をみせる医者、強欲な金貸しの描写もどこか諧謔的でさえある。

私はかつて、佐藤悦太郎という小学校高等科を終えてから終生岡山県都窪郡早島町で農業と蘭業に従事しひたすら勤労に励んだ人の晩年の回想記（謄写本）によって農村生活を知ることができた（拙著『明治期の庶民生活の諸相』第2章明治後期の岡山県南部における農村生活－佐藤悦太郎『ある老人の思い出の記』『ある百姓の日記』より－）。このような勤労に励んだ人々の記録は、その時代のその地の人々の生活についての貴重な歴史史料であり、後世への遺産となるであろう。

2 青木正美著『場末の子—東京葛飾 一九三三～四九年—』

2009年10月 日本古書通信社 A5判 366頁

中学3年の時から日記を書き続けるという80歳の著者の少年期の自伝的記録である本書は、はじめに、場末の子、少国民の頃、飢えの記憶、少年の春、あとがき、からなる。

(1) 本書の概要

著者は昭和8年4月東京府南葛飾郡本田村渋江に生まれた。栃木県生まれで、大正の終わり頃上京し職を転々とした父親はそのとき自転車修理業。昭和10年足立区千住仲居町、11年同梅田町、12年同本木町へと転々とする。そして昭和14年最後の引越し、葛飾区堀切。本木町は裏長屋、ここは間口2間・奥行5間10坪、所有者の車庫もあり住まいは4畳半と6畳。ここに本人、両親、姉弟妹5人、伯母（父の亡兄嫁）が暮らした。父親の仕事は、一時オート三輪での運送業もあったが露店での営業を含めた自転車修理業であった。

I 場末の子。もの心ついてから堀切尋常小学校1年の終わりまで。下町転々、ある宿命、子供達の浅草行、尋常1年生、ベーゴマ、メンコ・ビー玉、ボロ市など、魚取り、氷滑りなど、という項目で、転々とした住まいの場所の描写、その地のこどもたちの生活、小学校入学当初などが実に詳細に描かれている。

II 少国民の頃。小学校が国民学校となった16年堀切国民学校2年から昭和17年7月まで。国民学校2年生、ある宿命（つづき）、3年生、4年生、5年生、読書の思い出、活動館、の項目で、国民学校となった学校生活、その時のこどもの世界が描かれている。Iから続く“ある宿命”では身体的“異常”「絶壁」などとからかわれる頭の形で、著者の心に重いこのことを記している。

III 飢えの記憶。昭和17年7月集団疎開で新潟県、19年6月東京に戻るまで。学童疎開、出発、沼善寮、通学、寮生活、貢ぎ物、性体験、6年生、中途帰京の項目で、集団疎開生活が描かれる。集団疎開の貴重な記録。

IV 少年の春。東京に戻り、やがて終戦。21年3月国民学校卒業、高等科入学、22年中学校2年、24年の中学校卒業まで。終戦、玉音放送、世相、高等

科1年，新制中学2年，郊外から下町へ，中学3年1学期，2学期，冬休み，3学期，卒業の日，の項目で，戦後学校制度改編期の学校生活，子どもたちの時代を生きることなどが記されている。

(2) 描かれた庶民家庭と少年の生活

このきびしい時代の子沢山家族で，父の兄である夫を亡くした兄嫁が同居することによる母と伯母のいがみ合いなどの家庭関係は複雑である。父の母に対する横暴さや弟との喧嘩などもつつみ隠さない。学校の子ども，近所の子ども同士のいじめ，やっかみ，強者と弱者の抑圧と追従，著者がボスとして疎開先で乏しい食事から貢がせたこと，などを記す。そしてⅣになると，それ以前からの性の目覚めを赤裸々に描述する。

学校生活も，先生の特徴なども細かい。著者少年は勉強は嫌い，というけれど教科書の中身の記憶も凄く，優の多い良くできた子だ。

場末というのがそこは大東京の外延。浅草へ行く，映画をみる，Ⅳでの中学生の男子間の手紙のやり取りなど地方にないことであろう。カバーの昭和13年の写真は東京っ子だ。これ一枚という家族全員11人の写真，戦後とはいえ，これとて東京でこそ家族写真だ。

父の自転車修理業は戦後一時期繁忙を極め中学生の著者も大いに手伝う。小遣いを多く受けこれで貸本屋から本を借りむさぼり読む。

人生の春と言われる著者の少年期は春で始まらずⅡまでが秋，Ⅲが冬，そしてⅣがようやく春。本書はここで終わる。

やがて夏。それは中学校卒業後定時制高校に入学，間もなく古書店を始めこれが生涯の職となる。「あの悲しみに満ちた少年期」という。しかし，父親はほぼ一貫して自転車修繕業という仕事があった。多くが職なく転々とする時代，むしろ恵まれていたとさえいえる。家族も健康で，健全な庶民の家庭であった。著者が35点もの本を世に出すことができたのはそのような家庭で生育したからこそである。

(3) 後世に遺る貴重な記録

かつて歴史家木村礎氏は自伝的著作『戦前・戦後を歩む』において、生まれ育った葛飾の小松川について、貧しい人が多く住み、町は灰色、溝や池があり水害被害が多い地、正直一途の働き者の父、悪童であったという著者の着物をまくって叩くこともある母親などを描いた。この幼少期の描写を、私はこの地域におけるまじめに人生を生きる庶民の生活の優れた描写と評したが（本誌235号新刊案内）、本書はこの木村氏の自伝的著作とともに昭和前半期の東京東郊地域についての、後世に遺る貴重な記録である。

（『地方史研究』356 2011年2月1日）

3 荒井和子『先生はアイヌでしょー私の心の師ー』

2013年9月 北海道出版企画センター A5判 292頁

著者荒井和子は1927（昭和2）年北海道新得町生まれ。アイヌ民族の一家はもともとの旭川の近文コタンに戻り、和子は近文小学校入学、札幌近くの定山渓温泉街に一家は移り定山渓小学校に転じ卒業。北海高等女学校入学、再び一家が近文に戻り転校した旭川市立高等女学校を45年卒業。市役所4ヶ月で退職、1947年7月養護婦辞令を受け近文小学校の教員となった。著者には、アイヌ民族として生まれ小学校教員になるまでの、差別・蔑視と苦難の半生記『焦らず挫けず迷わずにーエポカシ エカッチの苦闘の青春ー』（1993年8月 北海道新聞社）がある。本書は、それに続く教員生活期の人生記録である。

本書は、まえがき、1 アイヌ出て行け、2 アイヌでも先生になれるの？、3 教員への出発、4 失敗した校内研、5 豊栄神社祭、6 教員資格取得、7 Wちゃん、8 雪像づくり、9 アイヌに生れて、10 先生はアイヌでしょー私の心の師、11 迷ったEちゃん、12 障がいをもつ児童と共に、13 叱り方に感動、14 初めての本州旅行、15 大好きな祖父エカシ、16 見合い、17 アイヌ研究、18 見合い・結婚・出産、19 アイヌ児童の学力調査、20 証人台に立った、21 いつの間にかドラマ化されて、22 互善会、23 高学年を受持って、24 私のアイヌ研究（一）、

25 私のアイヌ研究（二）、26 高学年の担任として、27 “あのくそったれアイヌ”，28 愛する母の日、29 転勤を勧めた高橋校長、30 はじめての転勤、31 美しい日々、からなる。

(1) 本書の内容

近文小学校養護婦辞令を受けた著者は、翌年1月末、病欠の教諭に代わって4年生の授業を受け持った。不安と怖気を覚えながら教室に入ると「アイヌ出ていけ。何しに來た。アイヌには教えてもらいたくない」と男子児童が指差しながら怒鳴った。「はじめて教壇に立っての試練はアイヌへの差別から始まった。これからどんな試練が待ち構えているかわからないが、どんな差別にも耐えなければならぬと意を強くした日だった」。アイヌは汚い、臭い、毛深、熊だ、近よるな、馬鹿やろう、著者の教員生活はこのアイヌ差別、蔑視の中の教員生活であった。

そのようなアイヌ差別にどこか怖けることが表に出るのであろうか、ある先生が和子に、「先生はアイヌだったら否定しないで私は立派なアイヌですと肯定しなさい」といわれた。本当の苦しみを分かっている、と反発を覚えるが、やがてこの池本先生を心の師と思うに至る（本書の標題となる）。同僚の多くの励ましを受け、また同僚の生徒の叱り方に感動するなど先生方から学び取っていく。そして、アイヌの生徒たちを励まし、和人生徒仲間とともに学び成長する教育を目指し、実現していく。

採用時は、養護婦、助教であったが、夜間講習会、夏期、冬期の講習会を受けて臨時免から仮免に、助教から教諭となるなど努力した。東京まで行って聞いた研究者のアイヌ研究の発表は、差別、蔑視に連なる、およそ現実離れたアイヌ世界が得々と報告されるというものであったが、著者は、教職員組合教育集会で、調査にもとづく「アイヌの学力」、「近文アイヌ系日本人の差別とひがみの実態」、「小学生の頭の中にいるアイヌ人」などを発表。アイヌが劣っていないことを論証し、アイヌを教育の中に据える努力をした。このようにして教員として成長した。

父親、母親、さらに祖父、祖母などなどの家族・一族と幼少・青年期については、前著に詳しく記されているが、時代を遡るとさらに激しい差別中で人間としての誇りをもって生き抜いてきた。父親は激しい気性、酒を飲み母にも辛くあたったが、旧土人保護法撤廃の運動に加わり、戸籍謄本の「旧土人」記載を抹消し、『アイヌの叫び』『続アイヌの叫び』を記すなど、誇りをもって人生を貫いた。母親は、聡明な人、逆境の中にも子どもを育て挙げ、「今は幸せだ、嘘みたいになら幸せだ」。そして「和子、世の中が平和になってきたが、私たちの受けた差別を、後世に残すべきだと思っているんだよ。…和子の半生記を是非書いてほしいの」と言い残した（前著まえがき）。

(2) 本書に学ぶ

本書は、「さまざまな障害を乗り越えて故郷の小学校の教壇に立ったものの、そこで待っていたのは、アイヌへの差別だった」。アイヌ民族として旭川に生まれた著者の自伝『焦らず挫けず迷わずに』の続編、そして、前著は「アイヌ民族として旭川に生まれた著者が、さまざまな障害を乗り越えて初志を貫き、ついに故郷の小学校の教壇に立つ。父母、友人、恩師らへの熱い思い、差別への激しい憤りが行間からはとばしる、感動の半生記」との東京都公立図書館資料詳細の内容紹介があるが、まさしく人間の尊厳の人生記録である。本書のまえがきは「続続編を、書かねばならないと思うのだった」で結ばれているが、この続々編の刊行を待望する。

『平成二五年度北海道アイヌ生活実態調査』の第4アンケート調査によると、「アイヌ文化振興法」、「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」衆参両院可決により改善しつつあるが、「差別を受けたことがある」が23%もあり、それは前回平成18年調査より実数、比率で増加している。受けた場面は学校が最も多い。アイヌ差別の原因・背景として、人種的偏見、アイヌ民族の歴史的社会的無理解、経済的偏見とともに、学校教育におけるアイヌ民族の理解を深める取り組みの不十分さをあげている。日本社会全体に深く格差が進行する中で、アイヌ差別も潜在しつつあるであろう。この2冊の書が、高等学校、中

学校の図書室に備え付けられ生徒たちが読むことができること、さらに、学校教育において教材としてとりあげられることを望みたい。

(『地方史研究』377 2015年10月1日)

4 宮原和子著『思いつくままに』

2014年10月 私家版 A5判 65頁

(1) 本書の構成

本書は、2013年10月から14年10月にかけて執筆した、生い立ち、横山の母、私の子どもころ、製薬会社に就職、君乃、職場、和子の結婚、子どもの誕生、持ち家がほしかった、吉川妹弟と顔合わせ、掃除が嫌いだ、今日このごろ、野菜作り、どうしたら痩せられるの、友に会いたい、文化の違い、お人好し、これからの準備、という18の小品文をほぼ逐年的に編成した、自らの人生の歩みを記したものである。はじめに（人生の後半に備えて）で、自らの人生を整理、記録し、子どもに残そう、と記している。

(2) 描かれた半生期

「遠い昔（昭和二十年）、私が五歳のとき、安田の父に連れられて業平橋にあった横山の家に行った」で始まる「生い立ち」で、「どこで生まれたか分からない」、父母を知らない幼日の著者和子、生まれてすぐ大工の安田の家にもられた。安田の父は和子を可愛がり、仕事に行くにもおんぶしていくほどであったが、妻が亡くなり育てられず横山の家に和子は置いていかれた。このようなミステリアスな和子の、父母、すぐ上とも10歳も違う姉3人と兄1人の横山の家での生活が始まる。間もなく3月10日の東京大空襲、姉に背負われて逃げ命は助かるが、兄は行方不明でついに帰らず。焼け出された一家は、五反田の親戚の家へ、そこも焼夷弾で焼け、目黒の親戚に行く。高齢で息子を亡くして無気力な父、一家の働き手は3人の姉。その働きで一家は業平橋に戻り、小さい雑貨屋を営む。横山の母は厳しく、幼少の和子にあたった。

どこで生まれたか分からない、実の父母を知らないで育った。実は母は横山の母の妹で、この母たちの生い立ちも凄まじい。横山の母、実は伯母は千葉

の勝浦の貧しい漁師，7人の兄弟のいる長女，15歳で上京して働き，やがて妻を亡くした20歳も違う男にみ込まれ妻となる。妹3人を東京に呼びよせ仕事に就かせるが，3人とも奉公先の男などの子を身ごもり，子どもを産む。子は貰われたりして3人の妹は親元に戻り，結婚したりする。実に壮絶であるが，この時代，東京に出てきた少女たちは様ざまなことに遭遇したであろう。

やがて中学校を卒業，就職難の中，近くの製薬会社に就職，昭和30年頃定時制高校に通いながら酒類問屋に勤め，台東区の地金屋に，そして医療機器を扱う会社，へと次々に転々とする。手当・賃金の低さ，長時間労働，雇い主家族との関係など，終戦直後の東京下町の町工場・企業で働く状況が記される。これは当時の中学校を終えた子どもたちの多くが経験，体験したことであろう。しかし，子どもたちは前向きだ。働きながら通った定時制高校では，似たような歩みの君乃と出会い，励まし，学びあった。

昭和36年，ふとした縁で通産省研究所労働組合の書記になったが，これが人生の転機となった。その頃，世の中が大きく変わり，ほとんどの職場が週休2日制となり，勤務時間も短縮，女性の社会参加も当たり前になった。組合書記となって「生きる誇りやものの考え方など，生きていく自信を与えてくれた職場で，働くことがたのしかった」。そこで九州福岡から組合の役員として東京に派遣された宮原章と出会う。章は休暇で九州の実家に戻った際にその女性と見合いし婚約もした。しかし組合委員長の配慮で再び東京に移り来た宮原と和子は結婚。小柄で，引っ込み思案の子。「チビ，ブス，短足と常に劣等感の和子」，「章という伴侶を得て，いつの間にか劣等感や引っ込み思案がなくなり人前でも話ができるようになった」。良き人との出会いであった。

(3) 穏やかな老後の生活

結婚当初，6畳1間の狭いアパート。やがて妊娠，流産。数年後，帝王切開で男児が生まれる。章護と命名。当時，千葉県の見川に住まいし，子育てしながらの人生を歩む。

やがて昭和60年頃に千葉県の、手賀沼湖畔の沼南町に移り住む。そこでのボランティア活動に参加し、社会福祉協議会主催の集会、様々な多種多様の習いごとなどに参加する。そしてあれこれ工夫し楽しみながらの野菜作りなどの日々である。さらに学ぼうと、二松学舎大学柏キャンパスにおける生涯学習講座の一講座「日本史探究：東京都その縁辺－地域と人々の生活－」を受講した。担当の松尾政司講師は、地域に生きる人々の記録、自分史作成を目標にしたが、それに応じて提出されたものの一つが本書である。このような、これまでの歩みを淡々と率直に、そして味わい深く記された人生の記録、自分史が提出されたことは、この松尾講座の成果の一つであるといえよう。

(4) 後世に残る人生の記録

本書は、戦中戦後という時代に、複雑な家族関係の家庭で生育し、仕事をし、夫婦協力して生き抜いた一女性の人生を描いた人生の歩みの記録である。自分自身の歩みを整理し、子ども、家族に遺すものとして書かれた本書は、しかし、その枠をこえて広く世に示され、後世に残る本となっているといえるであろう。

(『地方史研究』379 2016年2月1日)

5 田中武人『随想録 あなぐら徒然草』 2016年2月 樫散舎 B5判 57頁

本書は、長野県、主として佐久地方で中学校教員を職とした著者の、「自分の足跡(来し方)や関わった事象を辿つた(まえがき)」、「就職が決まる迄の事を中心」とした(あとがき)、人生半ばまでの記録、自分史である。

(1) 項目の題目

本文は、[1] 兄弟の名・親父の願い、[2] 墓地と五輪塔(=家の宝物)、[3] 父の思い出、[4] 母の役場勤め(追記：戸袋の落書)、[5] 弁天様の畑(追記：麦踏み)、[6] 渋柿と甘柿、[7] 木登り・石投げ、[8] 憧れの人“峰さ”、[9] 鍋・釜洗い(母の伝言)、[10] 鬼胡桃の思い出、[11] 鉄砲玉(=弾)の遊び、[12] 獅子舞・どんど焼き、[13] 狙っていた勲章、[14] 雨の藁屋根、[15] 蝗取り・つぶ拾い、[16] 開墾と新蕎麦、[17] ほや取りの思い出、[18] 私の修学旅行、

[19] 飛び立つ源五郎, [20] 恩師・M先生と私, [21] 親友・神立君と私, [22] 蕨採り・黄しめじ採り, [23] 雨漏りと隠居部屋, [24] 家族との旅, [25] 遍路道での拾い物, [26] 岐路のあれこれ, [27] 渾名「サボテン」, [28] 栗飯と長距離走, [29] 上野（駅）に着きし青年, [30] 東日本大震災5周年, の30項目からなる。

(2) その歩みの概略

[1] [2] で田中家の由来・来歴とそれに関わる事柄が記されたあと, [3] [4] で, 著者の幼少期からの, 北佐久郡北大井村八幡における一家の状況などが記される。父親が岩村田にあった地方事務所管轄の県道小沼線の管理責任者となって家族はその中間地点のこの北大井村八幡に家を借りて移り住んだ。その父親は, 昭和15年8月, 44歳で死去。時に家族は, 母親と小学校高等科1年の長兄, 4年の次兄, 翌年小学校入学・6歳の著者, 3歳の弟である。この父親の死去により「収入が途絶…一家は奈落の底に陥った」。翌年母親は幸いにも村役場の「小使い」となれた。長兄は役場に常泊し, 母に代わって配り物をする, 著者もその兄に弁当を届けたりするなど子どもたちも協力した。その年12月太平洋戦争勃発, 昭和17年春長兄は高等科を卒業し, 徴用で豊川の海軍工廠に勤務, 母親は役場小使いを辞めたが, その長兄からの送金はあるべくもなく, 母親の近隣農家の「日雇い仕事」による一家の生活, 「これからの生活が大変だったのだ」。

このような家の経済困窮状況の中で, 著者は学童期, 中学校生徒期を過ごす。[5] から後の大方は, その時期の少年時代の事柄の記録である。父親なき困窮した家庭の子としての家庭・母親の手助け, そして経済的に厳しい日々である。中学校時代, 午前4時間目の授業が終わるや1.5キロの家に走って帰り, 薩摩芋の混じった栗飯をかきこみ, 学校に戻り午後の授業に出る。著者は中学校の時, 修学旅行に参加していないが, [18] は中学校3年のときの修学旅行に行かなかった事情を記す。東京・鎌倉・江ノ島の旅行には経済的に参加できないと思っていたが, 母親が日雇い仕事の稼ぎで家計逼迫の中で修学

旅行の積み立てをしていることを知った。著者は急に熱が出て参加できないことになった。皆が出発した頃、著者は母の心配の中、なんと立ち上がった。病気は母親を騙す仮病であった。これによって積立金は使われずに家に残った。

このような困窮の境遇にありながら、武人少年はいじけていない。[5]～[17]・[19]・[22]には、母親・家の仕事を手助けする時も工夫し、おもしろさを見つける、ましてや遊びは内容豊かである。よく歩き、走り、体を動かし廻ることが記されている。

経済的に貧しい家庭でありながら心身共にすくすくと育った著者には幸運が巡りくる。[20]は恩師との出会い、高校への進学、が記されている。卒業目前中学3年の3学期の父母懇談会のあと、来訪したM先生が、母と長兄に高校進学を勧め、小諸高校に入学した。そしてM先生の高校長への掛け合いもあって日本育英会奨学生となり、さらに県立高校授業料免除生ともなった。またM先生の家の農業を手伝うというアルバイトもした。このようにして小諸高校卒業後、地元信州大学教育学部に入学、家庭教師や講義録作成・販売などのアルバイトをしながら卒業し、教員となっていった。

(3) 著者の感慨と私の思い

「今更ながら『波乱に富んだ幼少年期を送り、M先生を筆頭に虎の巻出版や家庭教師などの幸運に恵まれた高校・大学時代が過ごせたものだ』と感慨に耽っている」(あとがき)というが、[26]には人生の岐路でよき人との巡り合いが記されている。

そして本書を貫くのは母親への感謝の念であり、兄弟への思いである。老齡の母親を連れての旅、兄弟、家族での旅は昔参加しなかった修学旅行への思いと重なり感慨深いであろう。

この書には本評文執筆の私(神立)との関わりが[21]の題目となっているが、[20]、[29]にもそのことが記されている。中学校2年から高校2年まで私の一家は北大井村に住んだが、父がここで始めた事業はうまくいかず経済的

に困窮した。高校進学にあたっては担任のM先生が育英会奨学生となれるよう高校に働きかける、奨学金が貰えるまでは先生宅の農業を手伝うことで奨学金相当額を出す、といわれて小諸高校に進学した。奨学金を受けられるようになり、あわせて授業料免除生となった。このことは著者と私が共にであった。以後、生涯の友としての深いつながりとなり、今に至る。

(4) 著者への切望

はしがきで、広島・長崎原爆・敗戦70年、中東の泥沼化・テロ、安保法案、原発再稼働に論及しながら、「老齢の身が独り憂いたところで致し方なく、直接の関わりも無さそうだから脇にそっと寄せ置」くとあり、「渾名：サボテン」のようにのらりくらり的であるが、[30]で改めて原発事故の深刻さ、再稼働への動きを痛烈に批判している。この時代との関わりの意識、生きる時代・社会への目配りがあるからこそこの人生記録、人生史なのである。

「私はこの徒然草を涙ながらに書いている」という本書は、読む人の心を揺さぶる書である。「二人へ我が子（＝娘）にだけは伝えて置きたい」と記すが、時代・地域に生きたこの人生の記録は、昭和という時代の庶民家族の生き様の貴重な記録である。国立国会図書館などの公的機関に収蔵されて後世に伝えられることを願う次第である。

この人生記録は、大学卒業までのものであるが、著者は信州大学卒業後、大岡小学校分校2年の後、大岡中学校から浅間中学校までの中学校9校37年、合計39年を教員として教育の仕事に励んだ。本回想録期に続くこの教員生活の記録、人生後半の回想録が取り纏められることを切望する。

（『地方史研究』381 2016年6月1日）

Ⅱ 『胡桃澤盛日記』とその刊行

地域に生きる生き様の記録をどのように公にするか、それを飯田市歴史研究関係者による「胡桃澤盛日記」の刊行についてみていく。

「胡桃澤盛日記」刊行会編発行・飯田歴史研究所監修『胡桃澤盛日記』一～六

2011年10月～2013年12月 A5判 合計2788頁

胡桃澤盛氏が書き残した日記を、翻刻し、出版した『胡桃澤盛日記』は、1923・大正12年1月1日から1946・昭和21年7月16日までの、盛19歳から42歳、死の直前までの23年間のものである。もう一つ、河野村村長在任期間の内の昭和16年6月から20年6月にわたる公的な性格の村長日誌がある。本書はこの日記を、一・大正12～14年（盛19～21歳）、二・大正15～昭和4年（盛22～25歳）、三・昭和5～9年（盛26～30歳）、四・昭和10～13年（盛31～34歳）、五・昭和14～19年（盛35～39歳）、六・昭和19～21年（盛40～42歳）、という六巻として刊行。六には村長日誌（昭和16～20年）を合わせて収録。全巻合計2286頁となり、それに村長日誌173頁。各巻ごとに、詳細な解題、年譜がある。

(1) 下伊奈郡河野村と胡桃澤家・盛

第3巻解題（田中雅孝）によると、この日記の舞台、長野県下伊那郡河野村（現豊丘村）は天竜川東岸の河岸段丘地帯、水田米生産に加えて下伊奈組合製糸・養蚕主業地。胡桃澤家は祖父が明治20年代に土地集積して自作農から耕作地主となり、昭和初期自作地1町6反・小作地3町5反程度の中規模耕作地主家であった。盛（明治38年5月29日～昭和21年7月27日）は昭和4年1月父の死により家督相続し、後の村助役、村長（昭和15年10月～21年4月）時の公務専念を除き、農耕、養蚕、山仕事に励み、生涯、農業を生業とした。

(2) 日記に記されたこと

日記は私的記録であり、そこには身の周りのさまざまな事柄が記されているが、農家・農業者・農村生活者としての農業・生業について書き綴られている。父親の死で家督を継いだ昭和4年についてみると、3月「茄子・胡瓜を蒔く」「馬鈴薯牛蒡人參うぐいすな蒔く」、4月畑施肥除草、苗代しめる・粃蒔き、5月春蚕掃立て、6月田植・「蚕起きた」多忙になる、繭搔き、田の草取り、7月馬鈴薯収穫、春蚕掃立、8月蚕掃立、9月さまざまな養蚕、畑、水田作業、10

月稲刈り，11月稲扱き，12月田打ち。そして養蚕については「養蚕と云うものは恐ろしいものだ」「養蚕は面白い，亦心配なものだ」「養蚕気がつかれる」「養蚕の休ませ方が手古摺った。気が揉めるものだ」。冬期は，藁仕事などで，初年度から拾うと，「夕方は草靴を作った」「桑園の羽じらみを切る」「簇の藁を清水下の田ですぐった」。死の直前の最後の日記「七月十六日（火曜）晴，暑熱甚し 朝，裏の馬鈴薯を掘る。約十八貫。之で総計百五十貫弱と云う処。之だけ獲る事は相当な努力をも要するが，自家食料に充当すれば大した価値である。午后，石川のお父さん挨拶に見えられ，六時市田発の夜行にて帰京さる。乾ばつの為新田地帯一帯に水不足となる。西側の田へ硫酸少々（約一貫）を施し一部除草」と，淡々と農事を記す。日記には，ほぼ毎日，農家・農民には気懸かりな天気・天候を記す。

物事を知りたい，学びたいということに関わる記述が実に多い。若き日大正12年，19歳の日記には，社会問題講演会（神稲村）講師赤松克磨・聞く，早大教授阿部健一「現代の社会科学について」・聞く。「飯田へ此度信南自由大学設立決定」，その講座など記載，大正13年20歳，1月8日信南自由大学・山本宣治「人生生物学」受講5日間，1月28日自由大学高倉輝の文学論聞く，2月6日「普選断行・現閣倒壊の大示威運動」に参加，3月10日から自由大学・新明正道の社会学受講などである。乙種龍東農学校に学んだが，さらに実業補習学校に出席する。また図書館に通い，松本寛『小作問題の真相』，漱石『草枕』，『欧米名士の印象』，菊地寛『無名作家の日記』などさまざまな分野のものを読む。新聞『東京日日』『報知新聞』に目を通し，切り抜きを日記に挟む。このように懸命に，社会，政治，文化などを知ろうとしている。

（3）時局の推移と満州開拓推進

社会，政治へ見方は時代批判的でもあったが，時世の推移とともに次第に時代同調的となる。村民，地域社会の期待を受けて村長となると，満州移民を推進するなど，国策に寄りそうようになる。やがて開拓計画自体が応ずるものが少なくなり行き詰まるが，昭和19年になって河野村は積極的となる。それ以

前に河野村から渡満者があったが、昭和19年に新京特別市石碑嶺への分村・河野村開拓団を結成。それまでの躊躇いを一掃した胡桃澤盛村長が推進した。胡桃澤村長は19年3月18日先遣隊員6人と開拓団入植予定地に行く。河野村からの入植は20年にも3月まで続く。そして敗戦受諾後の8月16日河野分村民73人が自決した。翌21年6月5日にそのことを聞き知った。盛はその4月22日村長退任、村議候補も辞退し、憂鬱感つよまるなかで天理教本道への信仰を記し、7月27日自ら死を選んだ。日記の最後は7月16日で、それ以降は切り取られたという。遺書には「開拓民を悲惨な状況に追い込んで申し訳ない。あとの面倒が見られぬことが心残りだ。財産や家は開拓民に解放してやってくれ」とあると『信濃毎日新聞』（7月30日）は報じた。このような結末のこの盛日記のこの度の刊行を、ご遺族はよくぞ同意くださった。

（4）後世に遺る歴史史料

第1巻巻頭「『胡桃澤盛日記』刊行の意義」（森武麿）は、大正デモクラシーから昭和の戦争へと揺れ動く激動期を最前線で生きたあかし、地域社会における証言記録、中部養蚕地域において、農村・農民の日常生活から、読書活動、社会運動、政治活動、村政まで、地域社会に生活する人間の多様な側面を一望できる稀有の農村記録である、とその特質を記すが、原文読み取り、誤字訂正、注記、巻頭の系図・地図、各巻の主な登場人物、解説、年譜、作成など、翻刻、編纂の労苦は多大であったろう。本書は、飯田市歴史研究所関係者の総力によってこそ実現したものである。

大正期には自由大学・民衆の自己教育運動の一拠点であった下伊奈・飯田地域が、やがて国策に沿う満州開拓移民推進の地域となっていたことは、この地域独自の組合製糸業・養蚕業の展開・推移が深く関わっていたであろう。この地域の特性と時代、人々の営み・思いが書き籠められた胡桃澤盛の23年間の日記は、下伊奈・飯田地域史、そして日本近現代史の重要な史料である。

（『地方史研究』382 2016年8月1日）

Ⅲ 川東埤弘教授の研究を巡って

地域における人々の記録からその時代性、地域性を究明するかを川東埤弘教授（以下、川東氏と表示）の研究にみたい。地域に生きる生き様の記録を見出し、それをどのように公にするか、そして、それをもとにその時代性、地域性を如何に究明するか、本稿は、この歴史研究における重要な課題について一つの試みである。

1 川東埤弘著『帝国農会幹事岡田温——一九二〇・三〇年代の農政活動——』上下2巻

2014年7月・11月 御茶の水書房 A5判 1172+34頁

本書は、帝国農会幹事時代の岡田温の事績についての考究の書である。岡田温とは本書略年譜によると、明治3年愛媛県温泉郡石井村生まれ。32年帝国大学農科大学農学科乙科（後の実科）卒業、33年帰郷、温泉郡農会技師、愛媛県農会、大正10年、全国の農会の中央機関帝国農会の幹事となり東京に転居、大正13年から昭和2年衆議院議員、昭和11年幹事退職、帰郷。郷里の石井村長、県食糧営団理事長、戦後は温泉郡・松山市の農民組合連合会長、県農民組合連合会結成準備委員長となるなど多方面に活躍。昭和24年死去・78歳。

（1）本書の構成と内容

本書は、[上巻]序論、第1章大正後期の岡田温、第2章昭和初期の岡田温。[下巻]第3章昭和農業恐慌下の岡田温、第4章昭和農業恐慌回復期・日中戦争期の岡田温、おわりに、からなる。各章は、第1節帝国農会幹事活動関係（第4章は帝国農会幹事・特別議員活動関係）、第2節講農会・東京帝国大学農学部実科独立運動関係（第4章は講農会・東京高等農林学校関係）、第3節自作農業・家族のことなど、の3節構成、この他に第2章に温の農業経営と農政論、第3章に温の農村経済更生論、第4章に温の土地制度改革論、が第4節である。本文が上巻、下巻で1156頁、これに岡田温略年譜、温家・親戚家系図、あとがきで1172頁、人名索引34頁という大著である。

序論において、大正・昭和の三代にわたって愛媛県及び中央の帝国農会で永年にわたり活躍した第一級の農村のリーダー、優れた農政活動家、また多くの著作を残した実践的農業経営・農政理論家、衆議院議員もつとめた政治家でもあり、帝国農会幹事退職後も郷土において多方面で働き続けた。この岡田温の事績をめぐる紹介・論及・研究状況を検討して、あるのは部分的な略歴や紹介にとどまり本格的な伝記、研究はないとして、本書の課題を、地域に生まれ、学び、地域住民（農民）ならびに日本の農業、農民、農村のためにその生涯を捧げた、「小農論者」・温の事績を辿ることにより、今では殆ど忘れられた存在である温を世に明らかにし、正当に評価せんとする、と設定する。

(2) 検討の大きな枠組みとまとめ

章節構成にみるように、第一は、第1節帝国農会幹事活動で、889頁、これに第4節を含めると8割を占める。本書副題の所以である。1920年代の農村振興運動時代、1930年代前半の農村匡救運動・農村経済更生運動時代、農業恐慌回復期・日中戦争期について、農業・農村・農民問題との取り組み、農政活動を具体的に再現、紹介、研究、考察する。それは18に括っての内閣期ごとに、多くを温日記によりながらその時々の方角を逐年的に追っていく。温が記した多くの著作のうちの『農業経営と農政』（昭和4）、『農村更生の原理と計画』（昭和8）と、時代は本書対象期の後のその改訂版『農業経営の再検討』（昭和17）で農業経営論・農政論、農村経済更生論、土地制度史論を集約的にみていく。

第二は、第2節の講農会・東京帝国大学農学部実科独立運動関係である。講農会は実科同窓会、独立運動は文部省のその廃止構想に対する同窓会中心の独立運動である。

第三は自作農業・家族のことなど。幕末からの豪農・耕作地主の岡田家は、所有耕地減少、自作縮小を辿るが、続けた小作地経営、自作農業によって岡田家が営まれ、多方面で活躍する人びとが育った。

おわりに、において、「明らかになった点、およびファクト・ファインディ

ングと思われる諸点」をまとめる、として、第1.幹事就任以降の各種会議の決議案関与・立案、第2.帝国農会の重要な事業の制度設計と実行、第3.衆議院議員としての活動、第4.小農家族経営論者、第5.精力的執筆による農業・農政論への理論的貢献、第6.農村の過重負担の義務教育費の国庫増額運動、第7.昭和農業恐慌期の農村経済更生運動に果たした役割、第8.その期の深刻な農家負債整理問題に果たした役割、第9.帝国農会内部の人事関係、人間模様の記述、第10.帝国農会と関西府県農会連合との関係、第11.満州移民に対する温の態度、第12.東京帝大農学部実科のネットワークの凄さ、第13.実科独立運動、第14.その土地制度改革論、第15.衆議院における農政研究会の地位の低さ、第16.帝農立案農林省提案の他省阻止にみる農林省の地位の低さ、第17.温の人柄、大きな人格的影響力、をあげている。

(3) 著者の取り組みと岡田家資料類の収蔵

大学院以来、戦前日本の米価政策史研究の著者は後にそれを『戦前日本の米価政策史研究』（1990年5月 ミネルヴァ書房）とされるが、1980年松山商科大学教員となり岡田温の存在を身近に知り、松山市史編纂に関わるなかで岡田温家との交流、資料閲覧が始まり、やがて岡田家から温関係資料などの膨大な岡田家資料の寄贈を受け、松山大学に収蔵された。著者はこれらをもとに、『帝国農会幹事岡田温日記』全9巻（2006～14年）、『農ひとすじに 岡田温－愛媛県農会時代－』（2010年）を著し、さらにその後の論文「帝国農会幹事岡田温」19編、刊行書『帝国農会幹事岡田温日記』19巻をもとに、本書を書きあげた。岡田温の事績についての、詳細・綿密な重厚な、前人未踏の書である。ここに岡田温の愛媛県農会時代に続く帝国農会幹事時代についての事績検証は公刊されたが、帝国農会幹事退職後の事績についての研究がなされるであろう。

著者を介して松山大学は、この膨大な貴重な岡田温家資料類を収蔵、「岡田文庫農政関係資料目録」を作成し、公開に至っているが、これは松山高等商業学校以来の地域に根ざす大学にふさわしい業績の一つとなっているといえよう。

（『地方史研究』376 2015年8月1日）

2 地域に徹した川東舜弘氏の研究

1977年大学院博士課程単位修得、1980年松山商大教員となった川東氏の大学院生時代の研究は戦前日本の米価政策史で松山大学着任後も研究を進めた。その成果は『戦前日本の米価政策史研究』（1990年5月 ミネルヴァ書房）となり、博士学位を取得した。この書は多くの書評〔野田公夫『松山大学論集』2(1)1990年4月、加瀬和俊『社会経済史学』56(5)'91年2月、持田恵三『土地制度史学』33(4)'91年7月、大豆生田稔『史学雑誌』100(10)'91年8月、玉真之助『日本史研究』356'92年4月〕が寄せられる注目・評価の著書であり、ここに研究第一階梯は終了した。

松山大学着任後間もなく、1989年松山市史の編纂、農業部門を担当となり、史料探索の中で、巡り合った岡田温家から1992年岡田温資料（3,500点余、本3,226冊・資料類ダンボール108箱）、高畠家から94年高畠亀太郎資料（2万9,599点）の寄託申し出を受け、松山大学は受け入れ収蔵、それぞれ整理して「高畠亀太郎文庫資料目録」1996、「岡田文庫農政資料目録」2005年、を作成した。川東氏はこの資料整理、目録作成にもあたった。

川東氏がまず取り組んだのは高畠亀太郎資料である。その膨大な文書類のなかで、高等小学校卒業直前の明治30年1月1日から亡くなる直前の昭和47年7月15日まで、13歳から89歳にかけての76年間に書き綴られた日記を翻刻し、『高畠亀太郎日記』全6巻（愛媛新聞社）刊行、その日記を軸に、25篇の亀太郎研究論を執筆し、それを基に『高畠亀太郎伝－南伊予政治経済史－』（2004年3月 ミネルヴァ書房）を刊行した。全10章で、明治期、大正前期、大正後期、昭和初期、昭和恐慌期、昭和10年代前半、戦時下、昭和30年代、昭和40年代の10章、1 その時期の宇和島、2 家業面、3 家族面、4 家族のことなどの4節構成（第1章は小学校時代、独学・キリスト教・俳句などが合間に入る）。

南予宇和島の生糸商家に育ちやがて製糸業を始め、幾多の苦境を乗り越え愛媛県有数の製糸業者となり、宇和島市商工会議所会頭、愛媛県製糸業組合長、そして製糸工場を郡是製糸に売却、跡地を宅地化、貸家経営、山林所有・林業経営、木工・家具製造、不動産業など次々という生涯にわたる実業家、そして、

宇和島町・市議員，愛媛県議会議員，宇和島市長，衆議院議員，戦後公職追放の政治家，終生皇室崇拜，国策順応，戦後淡々，そして22歳でキリスト教洗礼，俳人でもあるという高島亀太郎の多彩な人生・事績を明らかにした。それは，まさしく本書副題の南伊予政治経済史そのものであり，伊予の地での生き様である。

もう一つの岡田温研究は，2004年1月から2014年2月までに28論文を執筆，それを基に，まず，温が帝国農会幹事に就任するまでの愛媛県時代（1870～1921年）について考察した『農ひとすじに 岡田温－愛媛県農会時代－』（2010年 愛媛新聞サービスセンター，以下『農ひとすじに』と表示）を刊行した。まず温についての先行研究を追い，設定した考察の視点から，対象とする時期を編年的に考察し，結果を次のように要約的に記す。その考察から，地域の農業，農政面における新たなファクト・ファインディングとして，温は帝国大学入学前に尋常小学校の教員をしていたこと，帝大入学にあたり岡田家は上地を売却したこと，温は恩師の玉利喜造の勧めで農事会本部に就職したこと，温は温泉郡，愛媛県の農会の技師に就任するや毎日の如く村々を回り農事改良・農民教育に献身的に活動したこと，四阪島煙害問題が東予地方で起こるや温は被害農民のために献身的に働き，従来学会で指摘された以上に大きな役割を果たしたこと，温は農村の実態調査を重視し，よく農業調査を指導したこと，また，愛媛県の技師も兼務し，愛媛県産業調査を立案，調査し，温が決定的役割を果たしたこと，また，大正4年から実施の米穀検査への温の考え，同7年に勃発した米騒動に対する温の米騒動観，同元年の衆議院選挙で農民側から候補に推されたこと，米投げ売り防止運動への考えなど，と多くのことがらを明らかにした。本稿の先の『帝国農会幹事岡田温』はそれに次ぐ帝国農会幹事時代（1921～1936年）についてのものである。

亀太郎日記，資料による98年2月から2002年10月までの論文は23（全て『松山大学論集』），続く『岡田温』2004年1月から2014年2月までの論文は28，最初の論文（『経済論叢』（京大））以外はすべて『松山大学論集』掲載である。

この間、他の学会誌などへの論考はないようで、すべてを亀太郎日記、温日記に傾注し、『松山大学論集』がその発表の場という「松山」沈潜の年月であった。

「高畠家から資料を頂いて、研究してくださいと要望があってから、ほぼ10年近くになる。精神をすり減らし、今回ようやく、完成して、ホッとしている。もし、亀太郎が日記を書き、資料を保存・保管していなかったなら、到底このような研究はできなかったであろう」（『高畠亀太郎伝 あとがき』）、「私は以前から日本農業史・米価政策史の研究をしていたので、岡田温関係の資料を見たときは大変感動し、運命的な出会いを感じ、また、『天命』とも思い、以後、もっぱら温の研究に没頭、集中してきた。今回、…温の全生涯のうち、前半部分であるが、ようやく一区切りがつき、ホッとしている」（『農ひとすじ』）・10年余り温の研究に没頭し「温の活動の事績をまとめることができ、ほっとしている」（『帝国農会幹事岡田温』）と、あとがきに記す。全力を注いだ渾身の取り組みであった。

その成果は、『亀太郎日記』全6冊は松山大学総合研究所の援助を受け愛媛新聞社から発行、『岡田温日記』全11巻は『松山大学総合研究所報』として刊行された。著者はあとがきに大学に謝意を記すが、大学の支援があつてこそこの川東氏の研究とその成果である。そして松山大学は川東氏を介して「高畠亀太郎資料」、「岡田温家資料」という貴重な地域資料を所蔵するに至り、地域に根ざす大学としての存在感を高めたのである。

これらの著書には、『高畠亀太郎伝』には4書評〔大西北呂志『史学雑誌』113(9)2004年9月、田中雅孝『歴史と経済』47(2)'05年3月、高嶋雅明『社会経済史学』71(0)'05年9月、山口由等『愛媛経済論集』24(3)'05年10月〕、『農ひとすじに』には3書評〔松田忍『史学雑誌』119(12)2010年12月、坂根嘉弘『歴史と経済』54(2)'12年1月、大豆生田稔『社会経済史学』78(1)'12年5月〕が寄せられ、『帝国農会幹事岡田温』の書評も出始めた（松田忍『史学雑誌』125(4)2016年4月）。

以上、愛媛県中予の人岡田温－農政運動家、南予の人高畠亀太郎－実業家・政治家の二人についての研究を見てきた。川東氏のこの研究は、まさしく地域に徹した研究である。

Ⅳ それぞれの課題

地域に生きる生き様の記録を見出し、それをどのように公にするか、そして、それをもとにその時代性、地域性を如何に究明するか、本稿は、この課題を追った。

Iの「地域に生きる人々の記録」では、5点の記録により地域に生きる人々の営み・暮らしの記録を見てきた。これらは後世に残る記録であり、このようなものを見出し、紹介を行っていくこと、これが私の為すべきことのひとつとして引き続き心掛けたい。

IIでは、地域に生きる人の記録の公刊の例を『胡桃澤盛日記』刊行にみた。それは飯田市歴史研究所関係者総力あがての翻刻・刊行物である。この地域の特性と時代、人々の営み・思いが書き籠められた胡桃澤盛の23年間の日記は、下伊奈・飯田地域史、そして日本近現代史の重要な史料である。やがてはこの書に関わった人によってこの書を踏まえた伊那地域史、人々の生活史の研究がなされるであろう。

IIIにおいては、地域における人々の記録によって地域における人々の記録からその時代性、地域性を如何に究めるかを川東氏の研究にみた。この川東氏には、自ら記されるように、その次の時期についての研究が課されている。『帝国農会幹事岡田温日記』刊行も第11巻・昭和10～12年、まででその後の昭和24年7月22日までの刊行も残されている。そして、松山大学着任初期の愛媛県農業構造研究論文の取りまとめも望みたい。さらに最近時は松山高等商業学校史に関わる2論考があるが、この学校史研究の進展も期待したい。川東氏はこの3月に松山大学を定年退職されたが、今後も地域研究拠点松山大学との連繫によってさらなる研究の進展と、松山大学の地域拠点大学としてのいっそうの充実を果たして頂きたい。